

野外調査で注意—磐梯山の野生動物—

磐梯山で、注意すべき野生動物が急増しているのをお知らせする。

私は、1979年から磐梯山の地質調査を行ってきた。当時、注意すべき野生動物は「ツキノワグマ」くらいであった。クマには何度か出くわした。クマに慣れてくると、撃退法が身に着く。『地球科学』78-1掲載の短報「義敷温泉」の調査中(2022.05.04)にも出くわした。私は、クマの姿が見えた瞬間、無意識にゴリラの警戒音のような声を出して撃退した。なお、私の経験では、山の中では「熊鈴」は効果がない。1988年ころ、熊鈴(南部鉄器製)2セットを腰につけて、地竹の藪を歩いていた。チリン・チリンと熊鈴は鳴り響いていたが、クマが私の後をずっと追ってきた。この他の大型野生動物では、「ニホンカモシカ」もいたが、襲ってくることはなかった。

1980～90年代、吾妻山系には「ニホンザル」が生息していた。アルビノの個体が出て、新聞に度々登場した。しかし、磐梯山周辺にはニホンザルはいなかった。ところが、2000年ころから磐梯山の東方の川桁山塊に出没し始めた。現在では国道115号線(猪苗代町—福島市)の沼尻付近で、50匹程度の群れを頻りに目撃する。さらに10年ほど前から、磐梯山の東麓でも見かけるようになった。2024年5月5日、赤埴林道で15匹程度の群れに遭遇した。車を止めて群れが通り過ぎるのを待っていると、ボス猿が車の脇約2mの松木の枝に座り、私の様子を見ていた。写真を撮っていたら、最後は牙をむき出しにして威嚇してきた。車の中だったので問題はなかったが、調査中に出くわすと危険である。

また、私が磐梯山の地質調査をしていた頃は「イノシシ」もいなかった。ところが、2018年5月20日に赤埴林道で遭遇した。イノシシは、猪突猛進してくるので、野外調査中だと極めて危険である。私は、2000年ころ、伊達市の鹿頭山でイノシシの集団と遭遇し、今までにな

い恐怖感を覚えた。すぐに、弁慶の立往生のような体勢を取り、ゴリラの警戒音のような声を出した。イノシシも大きな唸り声をあげたが、イノシシの方がゆっくりと立去った。イノシシは、野外で出くわすとクマ以上に危険である。

このほか、私は出会っていないが、山小屋の方によると、数年前から磐梯山山頂付近に「ニホンジカ」が生息しているとのことである。

野外調査時は防御の術がないので、野生動物との遭遇には注意しなければならない。忌避行為は、「ギャー」などの悲鳴を上げること、後姿を見せて逃げることである。野外での運動能力は、人間より野生動物の方がはるかに上である。逃げられるものではない。山に入る際は、野生動物との遭遇を覚悟し、実際に遭遇したらどう対処するか事前に決めておかねばならない。大抵の場合、その覚悟がないから遭遇時に慌てて襲われるのである。

余談であるが、野外での危険は野生動物だけではない。岩が降ってくることもある。新鮮な露頭が「なぜ新鮮か」といえば、常に崩落があり風化面が剥落しているからである。しかも、そのような露頭は重要な場合が多い。私は、1989年4月22日、磐梯山のグミ沢谷頭の「極めて重要な露頭」の調査をしていた。調査場所の頭上には、溶岩の末端崖が聳えていた。その日は、沢に入った瞬間から胸騒ぎ「何かいつもと違う」がしていた。その重要露頭の調査中に、胸騒ぎに耐えられなくなり、沢の側壁を走ってよじ登った。壁の中段まで登り振り返った瞬間、「ガク」「ゴツ」という轟音と共に谷頭の溶岩塊(直径約10m)が2個、30秒前まで私がいた場所に崩落していった。野外調査時には、五感を研ぎ澄まし第六感も働かせないと生還できない。今考えると、私は、岩が割れる前兆の電磁波や低周波を感じていたのかもしれない。

(2024.05.06 福島支部 千葉茂樹)



左：ニホンザル(車の中から2024年5月5日撮影)

右：イノシシ(車の中から、超望遠・高感度で2018年5月20日撮影)

— そくほう No.811 —

2024年7月1日発行 (毎月1回1日発行)

編集 地学団体研究会全国運営委員会事務局

〒171-0022 東京都豊島区南池袋4-16-6 古峯ビル402

Email: chidanken@tokyo.email.ne.jp

郵便振替 00160 - 2 - 144318 地学団体研究会

発行 地学団体研究会

TEL: 03-3983-3378 FAX: 03-3983-7525

https://www.chidanken.jp